

【特別支援学校用】

令和5年度学校評価 結果

達成度（評価）

- A：十分達成できている
- B：おおむね達成できている
- C：やや不十分である
- D：不十分である

様式1（特別支援学校）

学校名	佐賀県立ろう学校
-----	----------

1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を十分にを行い、体育祭、修学旅行を3年ぶりに実施した。また、体験学習・相談会、学校公開及び各種研修会（公開講座）には、外部から多くの参加があった。</li> <li>・進路指導においては、高等部1名の就業、中学部の1名については県外の特別支援学校（普通課）へ進学するなど、個々の生徒の希望する進路の実現をサポートできた。今後も就業体験や職場体験等を充実させ、キャリア教育の質の向上を図りたい。</li> <li>・いじめについては、アンケートや日頃の観察により早期に発見し、適切な対応ができた。個々の事案については、児童生徒が適切なコミュニケーションを学ぶためのきっかけとなるよう、事後指導を丁寧に行った。</li> <li>・家庭と連携して一貫した教育が行われるよう、学部便り、寄宿舎便り、連絡帳等を使って保護者との情報共有を図った。保護者会や個人懇談会では意見交換を行った。</li> <li>・本校が実践している聴覚障害教育や乳幼児相談等の相談業務について、県内全20市町の教育委員会や福祉・子育てを所管する部署を訪問し、担当者（保健師を含む）に説明を行い、本校が担っているセンター的機能の周知に努めた。その結果、新規の相談が増加し、幼児児童数増に繋がった。</li> </ul>
------------------	--

2 学校教育目標	県内唯一の聴覚障害教育の学校として、幼児及び児童生徒一人一人の個性や能力、教育的ニーズに応じて、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に準ずる教育を行い、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育み、将来、自立し社会参加できる力を育成する。
----------	--

3 本年度の重点目標	<p>(1)聴覚障害教育の専門性の向上を図るための研修の充実及び校内研究の推進</p> <p>(2)幼児児童生徒の個性や能力、教育的ニーズに応じた、きめ細やかな指導の実現</p> <p>(3)地域のニーズに応える聴覚障害教育のセンター的機能の充実</p> <p>(4)学部間の連携による「チームろう学校」としての組織体制の確立</p>
------------	---

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

重点取組			中間評価		最終評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	達成度 (評価)	実施結果	
●学力の向上	●児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着	○年間3回(毎学期)の保護者との面談を通して個別の指導計画等を学期毎に作成し、目標達成を図る。	・保護者と連携し、個別の指導計画等の作成、評価に係る環境整備をする。また幼児児童生徒の授業内容の理解度や授業への「ねがい」を把握し、適切な目標を設定する。(教務部)	A	A	・保護者と連携して、個別的教育支援計画や指導計画を作成したことで、幼児児童生徒一人ひとりのニーズに合わせた質の高い聴覚障害教育活動が実践できた。	
		○生徒全員の明確な進路意識の向上を図る。 ○希望進路の実現を目指す。	・生徒及び保護者の希望やニーズを把握するために面談、進路希望調査を実施する。 ・就業体験、事業所及び学校見学、進路学習会、ジョブティチャー派遣、企業現場における作業学習などの進路指導の取組みを充実する。 ・関係機関と連絡を密にとり、情報収集に努める。 ・進路指導やキャリア教育に係る情報を積極的に発信する。(進路指導部)	A	A	・就業体験や進路学習会等さまざまな進路指導にかかわる取り組みを通して、生徒の卒業後の進路意識の向上が向上した。 ・関係機関と連携し、情報を生徒・保護者、担任と共有し進路指導にいかした。また、進路だよりで生徒・保護者や職員に進路にかかわる情報を適時発信した。	
		○聴覚障害教育における指導の充実のために、年17回以上の職員研修を行い、実践的な指導力の向上を図る。	・各学部研究・研修(月2回)、新任者研修会(年10回)、指導力向上研修会、その他全体研修会や手話研修会等を実施する。(研究研修部)	A	A	・計画通り前半の研修を運営することができた。研修後のアンケートでも好評だった。	・各学部の研究とともに、様々な研修会を企画し、計画通り実施することができた。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会的、倫理親や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	◎日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成	◎「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員70%以上	・語彙力、文法、書き言葉や話し言葉などきめ細やかな言語指導を実施する。(各学部)	A	A	・「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員94%
		◎日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成	◎「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員90%	・「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員94%	A	A	・「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員90%
		○児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会的、倫理親や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○幼児児童生徒が学校間交流や共同学習を通して、豊かな心を身に付け、障害理解を深めるために交流年間計画80%以上を実施する。	・(幼)鶴華幼稚園(年5回)、久留米聴覚特支学校(年1回)、がらがらどんお話し会(年2回)。 ・(小)開成小学校(各学年年1～2回)、久留米聴覚特支学校(年1回)、居住地校(希望者)と交流(年1回～2回程度)。 ・(中)北山校との交流(年1回)、松梅校との交流(年1回)、久留米聴覚特支学校との交流(年1回)、居住地校(希望者)と交流(年2回程度)。 ・(高)津高手話部との交流(年2回)。	A	A	・各学部ともオンライン交流や直接交流が計画通り実施できている。 ・各学部とも計画通り、直接、またはオンライン交流を実施することができた。 ・当初計画になかった沖繩ろう学校とのオンライン交流では、各学部の学年単位や寄宿舎など、少人数での交流となり、より内容の深い交流となった。
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○望ましい生活習慣の形成	○「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒70%以上	・児童生徒間の交友関係を日頃から注視し、問題に繋がらぬトラブルを早期に発見し適切に対応する。 ・学校生活アンケートを実施し、結果から早期発見、対応する。(生徒指導部)	A	A	・「児童生徒間のトラブルが、大きな問題になる前に適切に対処している」と回答した教職員100%
		○望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	○「健康に良い食事をしている」と回答した児童生徒70%以上。	・アンケート調査を実施して、実態の把握に努める。(保健指導部)	A	A	・「健康に良い食事をしている」と回答した児童生徒89%
		○効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○早期発見・療育につなげるために、各地区の保健師の方々必ず1回は連絡をとり、連携に努める。	・HP更新、教育相談案内チラシを関係機関へ配布する。 ・県市町の母子保健事業との連携拡充(担当者への連絡) ・県保健福祉事務所主催の研修会等で保護者や各関係機関への周知活動や担当者への接渉等を行う。(支援部)	B	A	・年度初めのチラシ配布や学校公開の案内等で、県の担当者とは連携がとりやすくなった。 ・市町の保健師さんへの連絡がなかなか進んでいない。今後、学部コーディネーターを中心に連絡をとり、ニーズの把握や連携に努めたい。
●地域支援	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○「学校の情報を多く発信した。」と回答した教職員70%以上。 ○「学校の情報を多く発信した。」と回答した保護者70%以上。	・佐難言難聴部会と連携した公開講座や研修会において、難聴学級担当の先生方へのニーズを把握し、年度中に少なくとも1回は、各担当者と話す機会を作る。	B	A	・年度当初に、県内全ての難聴学級設置校へ連絡を入れたことで、公開講座や佐難言の研修会等で担当の先生方と話をするきっかけになり、相談につながるケースが増えた。また、研修内容の精選を随時行い、関係する分掌部と連携をとりながら計画的に実施する。 ・公開講座や研修会における評価の実施(支援部)
		○巡回相談・教育相談等をきっかけに、継続的な支援へつなげる学校を増やす。	○巡回相談・教育相談等をきっかけに、継続的な支援へつなげる学校を増やす。	・依頼校のニーズに対応した学部・教科担当者によるチームでの支援の実施 ・園・学校などへの支援・助言後に、その後の様子を電話やメール等で伺い、必要に応じて支援・助言を継続し連携を図る。(支援部)	A	A	・巡回相談でかかわった先生方には、必ず電話やメールでフォローを入れたり、研修会等の際に積極的に声をかけたりした。巡回後の取り組みについて、更に相談の連絡が入ったり、次年度の学びの場についての相談につながるケースも増えてきた。
		○業務改善・教職員の働き方改革の推進	○業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・各種会議の精選、及び時間短縮のために資料を事前配布する。 ・共有フォルダの有効的に活用し、効率的な業務遂行に努める。(教務部)	A	A

重点取組			中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	達成度 (評価)	実施結果
○聴覚障害教育の充実	○専門性(知識及び指導)の向上とスキルアップ	○「聴覚障害教育の専門性が以前より向上した。」と回答した教職員70%以上。	・校内外の各種研修会に参加し、研鑽を積む。 ・研究授業、公開授業の実践と評価を行い、ことばの力の育成を意識した実践力を養う。(各学部)	A	A	・「聴覚障害教育の専門性が以前より向上した。」と回答した教職員94%
○開かれた学校づくり	○聴覚障害や学校の情報を公開	○「学校の情報を多く発信した。」と回答した教職員70%以上。 ○「学校の情報を多く発信した。」と回答した保護者70%以上。	・学校だよりやHPをとおりて学校情報の伝達を充実する。 ・体験学習・相談会や学校公開などの啓発活動を実施する。(教務部・支援部)	A	A	・「学校の情報を多く発信した。」と回答した教職員97% ・「学校の情報を多く発信した。」と回答した保護者100%
○学部間連携による組織体制の確立	○学部間の情報を共有	○「学校間連携が取れた。」と回答した教職員70%以上。	・教務主任を中心に学部主事間の連絡を密にしなが、情報共有を図る。 ・学部毎に企画・実施していた行事を共有し、統一化する。(教務部)	A	A	・「学校間連携が取れた。」と回答した教職員90%

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	<p>・中間評価後に具体的な取り組み状況の検討を行い、PDCAサイクルを機能させ後半への改善策に繋がった結果、最終評価では全項目A評価を出すことができた。次年度は、明確な進路意識の向上と希望進路の実現に努めたい。</p> <p>・県内唯一の聴覚障害教育の学校として、幼児児童生徒一人一人の個性や能力、教育的ニーズに応じた個別最適な指導を実践し、日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成に取り組み一定の成果を上げることができた。次年度は、明確な進路意識の向上と希望進路の実現に努めたい。</p> <p>・新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、多くの学校間交流が対面で実施できるようになった。更に、今年度は沖繩ろう学校とのオンライン交流・学習が各学部・寄宿舎で数多く行われ、同じ障害を持つ児童生徒のとの交流をとおして、豊かな心を身に付け、障害理解を深めることができた。現在の交流校以外との交流計画もあり、積極的に推進を図りたい。</p> <p>・令和4年度から6年度までの全校の研究テーマとして「多様化する社会を生き抜く力を育てる。個に応じた指導を目指して」を挙げ、各学部・寄宿舎で研究を進め、聴覚障害教育の専門性の向上に努めてきた。令和6年度はまとめの年でもあり、本年度の成果を検証し次年度に繋げたい。</p> <p>・地域支援のセンター的機能の充実については、年度当初の県内関係機関訪問や難聴学級設置校への支援の呼びかけなどの積極的取り組みを行い、指導や相談件数の増加に繋がることができた。今年度後半より乳幼児教育相談・支援にも力を入れており、次年度の取り組みに繋げていきたい。</p> <p>・業務改善・働き方改革では、ICTの有効活用や資料の事前配付の徹底等が浸透し、業務の効率化や時間短縮、会議等の削減にも役立つようになってきた。結果、時間外勤務の減少にも効果を発揮している。「チームろう学校」として、風通しのよい職場環境の整備に引き続き取り組んでいく。</p>
--------------------	--